H-6 「名詞＋(が+)(XP+)(で)ある」型複雑述部における主格助詞の随意性について

小川　芳樹（東北大学）／ogawa@ling.human.is.tohoku.ac.jp
新国佳祐（新潟青陵大学）／keiyu@n-seiryo.ac.jp
和田裕一（東北大学）／yuwada@cog.is.tohoku.ac.jp

要旨

日本語には、主語に主格助詞が義務的でない統語環境が、述部が「である／ある」の場合に限っても、少なくとも 3 つある。(1) 尺度名詞の主語と述部との間に度量句が介在する「あの壁は高さ（が）10m（で）ある」のような場合、(2) 主語 NP と「である／ある」が、複数性または数量の多さを表す複雑述部を形成している、「この食品は栄養（が）豊富である／「かぼちゃ」の語源には諸説（が）ある」のような場合、(3) 主語 NP と動詞「ある」から成る複雑述部内での主格助詞が、主節では削除を許さないものの、関係節内では削除を許す、「迫力(が)ある映像／この映像は迫力*(が)ある。」のような場合である。

本発表では、百人規模の容認性質問調査の結果とコーパス調査の結果を踏まえて、これら 3 タイプの主格助詞の随意性について、それぞれ、(1) 複雑述部の語彙化、(2) 述部への名詞編入、(3) 動詞の脱テンス化に基づく形態統語論的説明を与える。

1. Watanabe (2011, 2013)の分析とその問題点

(1) a. The wall is 10m tall/high.　(絶対尺度構文／*相対尺度構文)
　　b. あの壁は 10m 高い。　(相対尺度構文／*絶対尺度構文)
(2) a. あの壁は高さが 10m である。　(Watanabe: 名詞)
　　b. あの壁は高さ 10m である。　(Watanabe: 形容詞)
(3) a. あの壁は高さが 10m ある。　(Watanabe: 名詞)
　　b. あの壁は高さ 10m ある。　(Watanabe: 形容詞)
(4) a. $[_{\#P}$ MP $[_{\#'}$ AP # (= ϕ)]]] →（述部 AP の倒置）→
　　b. $[_{DimP}$ AP $[_{Dim'}$ $[_{\#P}$ MP $[_{R'}$ AP #]] Dim]]
　　(Watanabe (2013: 267); cf. Corver (2009))

(5) a. shorten, darken, sicken, …　(deadjectival)
　　b. lengthen, heighten, strengthen　(denominal? deadjectival?)
　　c. frighten, hearten, threaten　(denominal)

(6) (6a)と(6b)の平行性は、「高さ／低さ」が形容詞であることを示す。
　　a. このビルは、{高さ／*低さ}20mある。
　　b. The man is 5 feet {tall／*short}.

1.1. 共時的事実

(7) 「低さ／低い」が尺度構文に常に使えないわけではない。
a.*このビルは、低さが 20mある／である。
b. The session could be as short as 30 min. (COCA; 2014)
c.*The building has the shortness of 10 meters.
d. このビルは 10m の低さである。(Watanabe (2013: 264))

(8) 形容名詞は繋辞を伴って形容動詞になるが、尺度名詞は形容動詞にならない。
a. 健康が大事だ／健康な男 (形容名詞の場合)
b. 高さが大事だ／*高さな壁 (形容詞語幹＋名詞化接辞「さ」)

1.2. 通時的変化の事実

(9) あの壁は、10m 高い。 (相対尺度構文／*絶対尺度構文)

(10) 明治時代までの日本語には、英語の(1a)と同様の絶対尺度形容詞構文があった。
a. 女ども、たちまちにたけ一丈ばかりの鬼になりて、十四五丈高く躍り上りて叫びののしるに、 (『宇治拾遺物語』; 1220 年)
b. 一尺も長き泛子（うき）を使ひ、海草を餌にしてブダヒを釣る長閑さ加減などを (『太陽』; 1901 年)

1.3. 主格助詞削除の容認性にかんする個人差と構文間差

まず、2019 年 4 月に、日本語を母語とする 18~22 歳の大学生計 130 名を対象に、(11a,b),(12a,b)の 4 タイプの文の容認性を調査した。

(11) a. あの壁は高さが 10m である。 (「が」有り・「デアル」条件)
b. あの壁は高さ 10m である。 (「が」無し・「デアル」条件)

(12) a. あの壁は高さが 10m ある。 (「が」有り・「アル」条件)
b. あの壁は高さ 10m ある。 (「が」無し・「アル」条件)

具体的には、2（「が」有り/「が」無し）×2（「デアル」/「アル」）の 4 条件を均等にカウンターバランスをとって割り振った刺激文 24 文とフィラー文 30 文を含む計 54 文をランダムな順序で各参加者に呈示し、5 段階（1: 不自然に感じる～5: 自然に感じる）で容認性を評定してもらった。評定値の平均は「表 1」の通り。

	「である」条件	「ある」条件
「が」有り条件	4.48 (0.54)	4.51 (0.56)
「が」無し条件	4.42 (0.58)	3.91 (0.89)

注：括弧内の値は標準偏差
＜表 1：「デアル／アル」型尺度構文の主格有無と容認性＞

統計分析の結果、「が」有無 ×「である/ある」の交互作用が有意であり、(12b)タイプが他の 3 タイプの文より容認性が有意に低いことが示された。

第 2 に、2019 年 12 月に行った調査では、18〜23 歳の大学生計 191 名を対象に、次の(13a,b)のように、「が」の有無と「アル」型尺度構文が主節と関係節のいずれに生じるかを操作して、同じように文に対する容認性を尋ねた。

(13) a. 彼が乗り越えたあの壁は、高さ(が)5 メートルある。(主節条件)
b. 高さ(が)5 メートルあるあの壁を、彼は乗り越えた。(関係節条件)

ターゲットの刺激文(13)は第一の調査同様 24 文用意し、それらを 24 のフィラー文とともにランダムな順序で呈示して、容認性を 5 段階 (1: 不自然に感じる〜5: 自然に感じる) で評定させた。評定値の平均は「表 2」のような結果になった。統計分析の結果、「が」有無×主節/関係節の交互作用が有意であり、主節条件では「が」有り条件の容認性が「が」無し条件よりも有意に高かったが、関係節条件では「が」の有無による容認性の差は有意ではなかった。また、「が」有り条件では関係節条件よりも主節条件で容認性が有意に高い一方で、「が」無し条件では主節条件よりも関係節条件の容認性が有意に高かった。

	主節条件	関係節条件
「が」有り条件	4.30 (0.68)	4.14 (0.68)
「が」無し条件	3.96 (0.83)	4.07 (0.75)

注：括弧内の値は標準偏差
＜表 2：「アル」型尺度構文の生起環境と主格有無の容認性＞

これらの事実から、「高さ」などの尺度表現が名詞でも形容詞でもある（あり得る）ため主格助詞が随意的になるとする Watanabe (2011, 2013)の分析は、支持できない。

2. 複雑述部「高さが（10m）ある」形式の語彙化

2.1. Kishimoto and Booij (2014)の「名詞＋（が＋）ない」の語彙化分析

(14) a. Class I: ぬかり(が)ない、危なげ(が)ない, etc.
b. Class II: 忌憚(が)ない、だらし(が)ない, 大人げ(が)ない etc.
c. Class III: しょう*(が)ない、何気(*が)ない, etc.

(15) 与格主語が可能であれば Class I、不可能ならば Class II/III：
a. 彼の運転には危なげがない。 (Class I)
b.*その事故にはしょうがない。 (Class III)

(16) N が主格属格交替を許せば Class I/II、許さなければ Class III：
a. 大人げ(が／の)ない人 (Class II)
b. しょう{が／*の}ないこと (Class III)

2.2. 「N＋{が／の}＋ない」構文と「N＋{が／の}＋ある」構文の平行性

(17) a. 私(に)は、彼と面識*(が)ある。　(cf. 面識がある≒顔見知りだ)
b. かぼちゃの語源(に)は諸説(が)ある。(cf. 諸説ある≒定説がない)
c. 君の考え方(に)も一理(?が)ある。　(cf. 一理ある≒合理的だ)
d. その文の解釈(に)は二通り(?が)ある。(cf. 二通りある≒多義的だ)
e. 彼の心労(*に)は、察するに余り(*が)ある。(≒拝察もできない)
f. 私(*に)は、背中に痛み*(が)ある。　(cf. 痛みがある≒痛い)

(18) a. 私(に)は彼と面識*(が)ある。 (= (17a))
b. 私(に)は彼と面識*(が)ない。

(19)「N＋{が／の}＋ある」構文の分類（K&B を援用）：
a. (17a)は語彙化前の純粋に統語的な与格主語構文
(与格主語は許すが、主格削除を許さない)
b. (17b-d)は Class I の語彙化　(与格主語も主格削除も許す)
c. (17e,f)は Class II/III の語彙化（与格主語も主格削除も許さない)

(20)「N＋{が／の}＋{ない／ある}」構文における通時的な語彙化の進行：
a. だらし**の**ない風をして（志賀直哉）→　現代では「だらしない」
b. 思い掛け**の**ない事（内田百閒）→　現代では「思いがけない」
(21)　不潔を打ち消して余り**の**あるような美味 →　現代では「余りある」
(阿川弘之（1960)『空旅・船旅・汽車の旅』)

		CHJ (奈良～大正時代)	BCCWJ-NT (1970s~2000s)	変化の特徴
	収録語数（語）	16557245	104911460	
(a)	だらし{が／の}ない	13	70	格助詞が脱落する方向の変化
	だらしない	4	207	
	格助詞削除の割合	23.5%	74.3%	
(b)	由緒{が／の}ある	9	20	格助詞が脱落する方向の変化
	由緒ある	12	160	
	格助詞削除の割合	57.1%	88.8%	

＜表 3：「N+(が+)ない／ある＞の通時的語彙化＞

(22) a. BCCWJ-NT 内に「が／の／ϕ」あり（K&B の Class I/II)：
責任（が／の）ある、特色ある、権威ある、名誉ある、歴史ある、
迫力ある、節度ある、勇気ある、秩序ある、限りある、誠意ある、
命ある、常識ある、価値ある、意義ある、形ある、活気ある。。。
b. BCCWJ-NT 内に「の／ϕ」のみあり／「ϕ」のみあり（Class III）：

品格（の／*が）ある、由緒ある、実りある、調和ある、
前途(?の)ある、妻子(??の)ある、栄え(*の)ある、名??(の)ある。。。

2.3. 「高さ（が）(10m)ある」構文に進行中の語彙化

(23) a. X は高い／高くもある／高くありません。(cf. Nishiyama (1998))
b. X は高さが高い／低い。→ 価値が高い／湿度が高い／人気が高い, etc.
c. X は高さがある／価値がある／人気がある／湿度がある, etc.
d. X は高さが 10m ある／*価値が 1 万円ある／*人気が 1 万人ある。

(24) a. X は、価値が高い≒価値がある／*価値の高さがある。
b. X は、人気が高い≒人気がある／*人気の高さがある。
c. 今日は、湿度が高い≒湿度がある／*湿度の高さがある。

(25) Generalized Lexical Integrity (Lapointe (1985: 8))
No syntactic rule can refer to elements of morphological structure.

(26) a. [パリを[$_{V0}$ [$_{N0}$訪問]する]]／*[$_{V0}$ [$_{NP}$パリの訪問]する]（する= verbalizer）
b.[$_{V0}$ [$_{N0}$リンゴ]狩り]／*[$_{V0}$ [$_{NP}$青森のリンゴ]狩り]

(27) [$_{V0}$ [$_{N0}$高さが]ある]／*[$_{V0}$ [$_{NP}$人気の高さが]ある]（ある= verbalizer）

(28) 「名詞＋が＋{ある／ない}」構文では、語彙化の進行度に個人差がある。
語彙化の初期には「が」が随意的に削除可能。語彙化の最終段階では「が」削除が義務的なものと、「が」削除が不可能なものとに分かれる。

(29)「高さ(が)MP ある」の語彙化の方向と段階が、
a.「痛み*(が)ある」「しょう*(が)ない」と同等→「が」削除を容認しない
b.「諸説(が)ある」「大人げ(が)ない」と同等→「が」削除を容認する
c.「余り(*が)ある」「何気(*が)ない」と同等→「が」削除が義務的

これら 3 通りの話者がいる中で、「高さ（が）MP ある」について、これを(29b,c)と同等の語彙化レベルだと判断する話者が大半を占めるならば、「高さ MP ある」は「高さが MP ある」と容認性の平均値に差がないはず。一方、(29a)と同等の語彙化レベルだと判断する話者が一定程度いれば、その割合に応じて、「高さ MP ある」は「高さが MP ある」よりも容認性の平均値は低くなるはず。実際の調査で得られた「表 1」の結果は、後者の可能性が、より妥当性が高いことを示唆。具体的には、1~5 の 5 段階（1:不自然に感じる～5:自然に感じる）の中で評定値 5, 4, 3 以下をつけた話者が、「高さが MP ある」の場合は、それぞれ 7 割、2 割、1 割で、「高さ MP ある」の場合は、それぞれ 5 割、2 割、3 割であったので、評定値の平均は 3.9 程度になった、と説明可能。

3. 関係節の脱テンス化と語彙化

(30)　テンス・アスペクト・ムードから解放　(高橋 (1987))
　　a.*その路はS字型に曲折した／*その時計はドームを型どった。
　　b. S字型に曲折した路／ドームを型どった古めかしい時（脱テンス化）

(31)　成人の日本語話者の文法では、関係節にCPはない。（Murasugi (1991)）
(32)　a. 歩美ちゃんは小っちゃいのこけし好き。　　(Ayumi; 2歳11月)
　　b. これは、じいちゃんにもらったのカバー　　(Ayumi; 3歳0月)
　　(Ogawa (2019))
(33) a. 英語の関係節：[$_{NP}$ [$_{CP}$ (that) [$_{TP}$ Subj … V …]]]
　　b. 日本語の関係節（幼児の文法）：[$_{NP}$ [$_{CP}$ [$_{TP}$ Subj … V …] C(の)] NP]
　　c. 日本語の関係節（成人の文法）：[$_{NP}$ [$_{TP}$ Subj … V …] NP]

(34) {関係節内／限定用法}でのみ使用可能な「N+が＋{ない／ある}」構文：
　　a. 彼の何気(*が)ない仕草／*彼の仕草は何気(が)ない。
　　b. 名??(が)ある陶芸家／*この陶芸家は名(が)ある。
　　c. 栄え(*が)ある初代受賞者／*初代受賞者は栄え(が)ある。
(35) {関係節内／限定用法}でのみ「が」削除が可能な「N+が＋ある」構文：
　　a. 特徴(が)ある歩き方／彼の歩き方(に)は特徴*(が)ある。
　　b. 由緒(?が)あるお寺／このお寺(に)は由緒*(が)ある。

(36) 格助詞「が」は、完全なCP/TPの投射をもつ節内で、C/TによるDPの主格照合が行われたときにのみ生じる形態格である。

関係節内の「脱テンス化」とCP/TPの随意性：
C/Tが完全な場合には主格照合あり&「が」あり。C/Tが不完全な場合には主格照合なし&「が」なし。実験参加者全体の中で、この2つの可能性が拮抗していたために、「が」の有無にかかわらず、ほとんどの参加者が、評定値4ないし5をつけ、評定値の平均がいずれも4.1前後になった、と説明できる。(cf.「表2」; 以下のURLも参照)
http://ling.human.is.tohoku.ac.jp/media/files/_u/topic/file/percentage_data_1_2.pdf

4. 「X(＋が)+(AS) MANY (AS MP/Y)＋だ」構文における名詞編入と主格助詞削除

(37) Xの量の多さを度量句（Measure Phrase; MP）で表す絶対尺度構文Aと、Xの量の多さをYの量との比較で述べる相対尺度構文Bは、同一の尺度構文の変種である。
　　a. Trade Commission estimated that lost online retail sales due to privacy concerns may **be as much as $18 billion**.　(COCA; 2012)（構文A）

b. The number of books and articles **are as numerous as the grains of sand on the beach.** / The reasons for this **were numerous.** (COCA; 2012) (構文 B)

(38) 日本語では、尺度構文 A も尺度構文 B も、同じ統語環境で主格削除を許す。

a. X は、{定価(が)100 円だ／一杯(が)100 円だ／100g(が)100 円だ}。(構文 A)

b. X は、{高さ(が)10m だ／長さ(が)20cm だ／深さ(が)50m だ}。(構文 A)

c. X は、{高さ(が)十分だ／長さ(が)十分だ／深さ(が)十分だ}。(構文 B)

(39) a. X は、{栄養(が)豊富だ／鉄分(が)たっぷりだ／休養(が)十分だ}。(構文 B)

b. X は、{お腹(が)いっぱいだ／やる気(が)満々だ／課題(が)山積みだ}。(構文 B)

(40) 英語では、構文 B の中の項名詞は「多さ」を表す述部形容詞に編入可能。

a. rich in {oil/nutrient/food}, sufficient in food, full of {care/power/stress}, ...

b. {oil-rich, nutrient-rich}, food-sufficient, {careful, powerful, stressful}, ...

(41) 述部への項名詞の随意的編入による格認可（cf. Baker (1988), 西山 (2019)）：

a. [$_{TP}$ X-wa [[YP-**ga** MANY/MUCH (as MP) Pred(de)] v(ar)] T(u)]　(主格あり)

b. [$_{TP}$ X-wa [[[YP+MANY/MUCH] (as MP) Pred(de)] v(ar)] T(u)]　(主格なし)

参考文献

Baker, Mark (1988) *Incorporation: A Theory of Grammatical Function Changing*, University of Chicago Press, Chicago.

Corver, Norvert (2009) "Getting the (Syntactic) Measure of Measure Phrases," *The Linguistic Review* 26, 67-134.

Kishimoto, Hideki and Geert Booij (2014) "Complex Negative Adjectives in Japanese: The Relation between Syntactic and Morphological Constructions," *Word Structure* 7, 55-87.

Lapointe, Steven (1985) *A Theory of Grammatical Agreement*, Garland, New York.

Murasugi, Keiko (1991) *Noun Phrases in Japanese and English: A Study in Syntax, Learnability and Acquisition*, Ph.D. dissertation, UConn.

Nishiyama, Kunio (1999) "Adjectives and the Copulas in Japanese," *Journal of East Asian Linguistics* 8, 183-222.

西山國雄 (2019)「日英語の複合形容詞—oil-rich と「欲深い」の平行性—」, 西原哲雄他(編), 『言語におけるインターフェイス』, 開拓社, 東京.

Ogawa, Yoshiki (2019) *Ogawa Corpus*, TalkBank, Pittsburgh, PA.

高橋太郎 (1987)「動詞（その 3)」, 教育科学国語研究会(編) 『教育国語』90 号. [高橋太郎(編) (2003) 『動詞九章』に第 8 章として再録.]

Watanabe, Akira (2011) "Adjectival Inflection and the Position of Measure Phrases," *Linguistic Inquiry* 42, 490-507.

Watanabe, Akira (2013) "Non-neutral Interpretation of Adjectives under Measure Phrase Modification," *Journal of East Asian Linguistics* 22, 261-301.